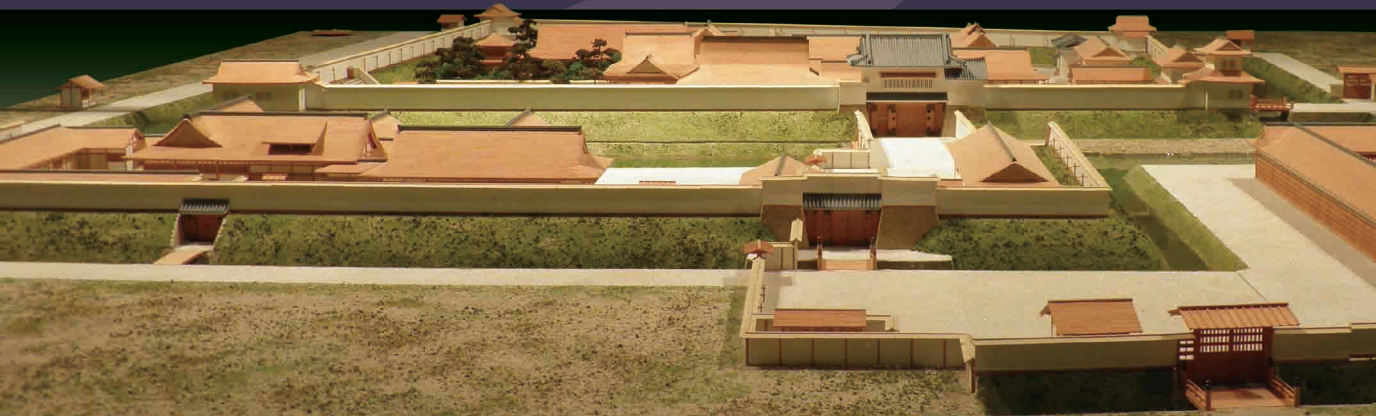


—「徳川将軍家」ここにあり—

ながはらごてん

# 永原御殿

近江国野洲郡永原



国指定史跡「永原御殿跡」



◆国指定史跡

「永原御殿跡」ブックレット

- 一、永原御殿の周辺と地理
- 二、戦国時代の野洲郡永原
- 三、永原御殿の歴史・記録・史料
- 四、永原御殿の全体構造
- 五、永原御殿の遺構を探る。
- 六、永原御殿の発掘調査

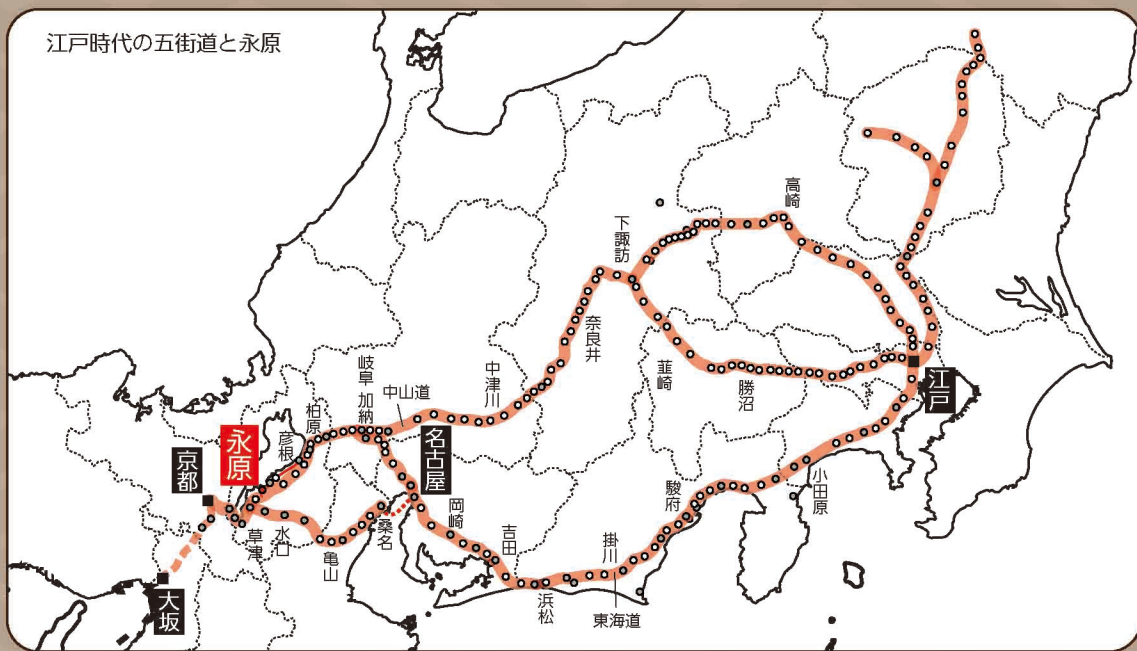


▲琵琶湖側の上空からみた永原御殿跡

永原御殿は、江戸時代初期に徳川家康・秀忠・家光の三代の将軍が江戸と京都間を往来した時に宿泊した、将軍家専用の城郭です。現地には、大規模な土塁や堀などの城郭遺構がよく残っています。

この冊子を持って、ぜひ遺跡探訪をお楽しみください。

江戸時代の五街道と永原

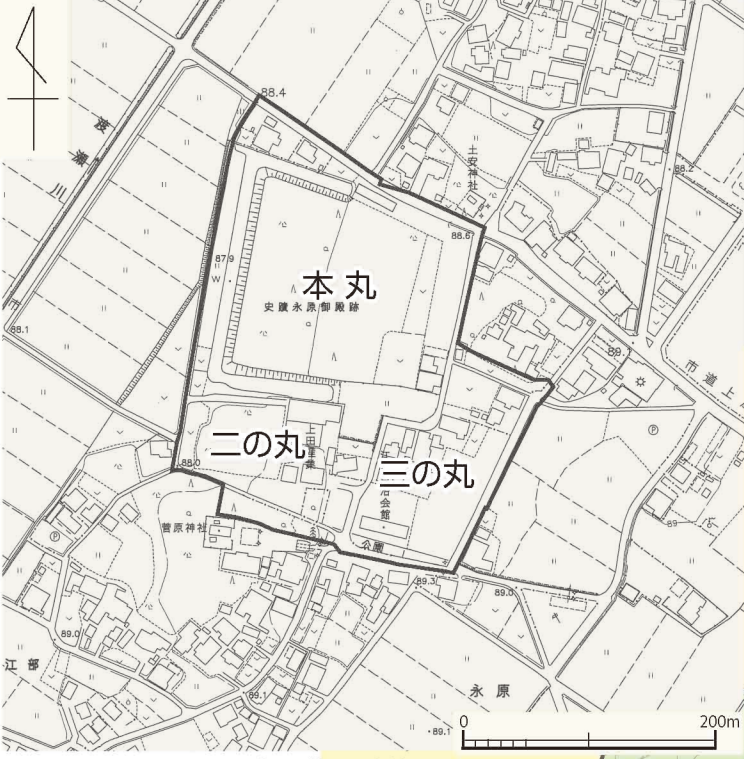




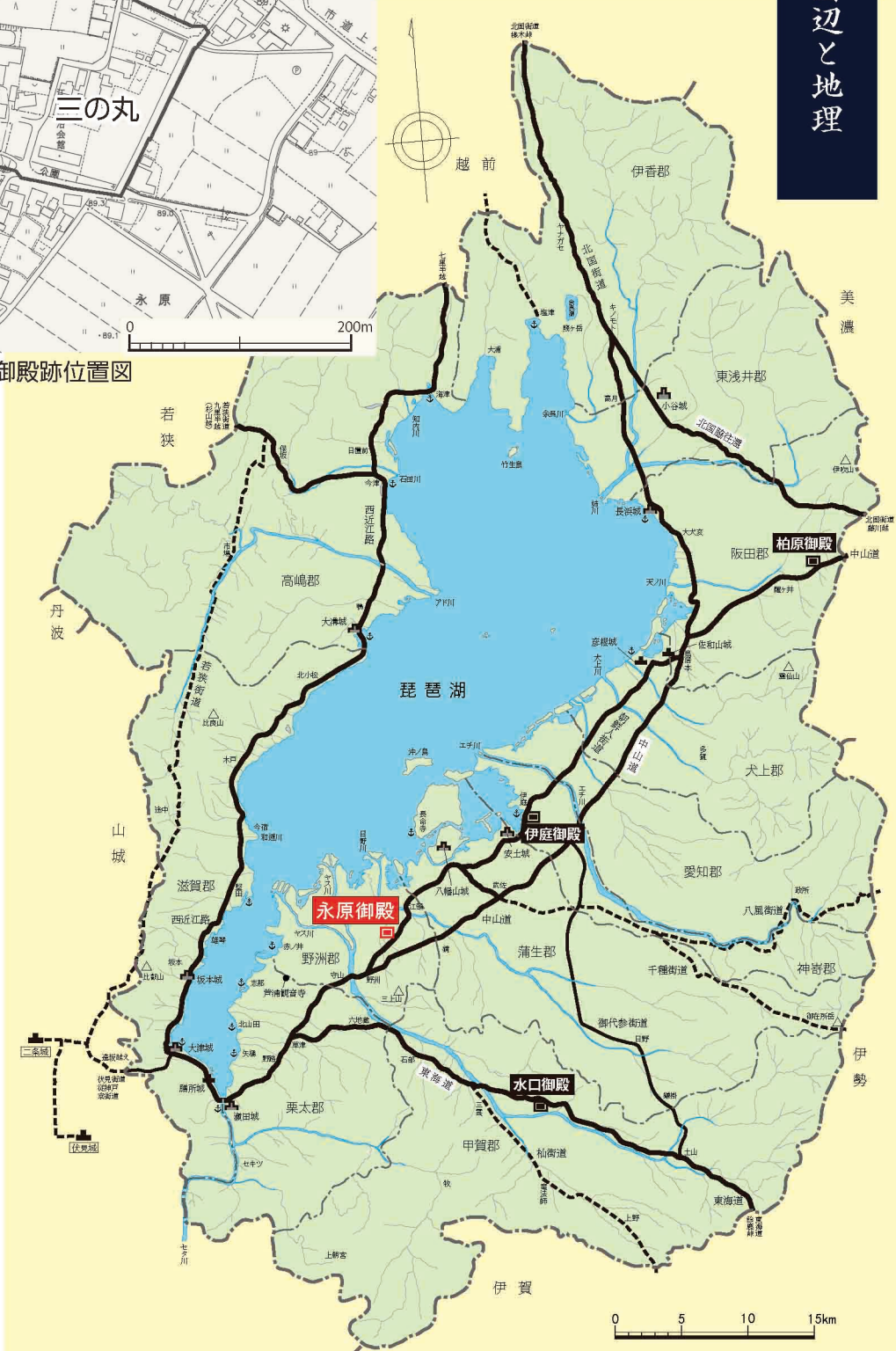
# 一、永原御殿の周辺と地理

京の都から関東へ下る際、近江の草津からは東海道と中山道に分岐します。中山道は、野洲郡行合村（野洲市行畑）でさらに二つの街道に分かれています。

内陸側の中山道とは別に、琵琶湖側の近江八幡・彦根を通る道を「朝鮮人街道」と呼びます。



永原御殿跡位置図



「朝鮮人街道」の名前は、江戸時代に朝鮮通信使（李氏朝鮮からの使節団）が通ったことに由来します。この道は、戦国時代には「下街道」などと呼ばれ、安土城下も通過する重要な幹線道でした。

慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原の戦い

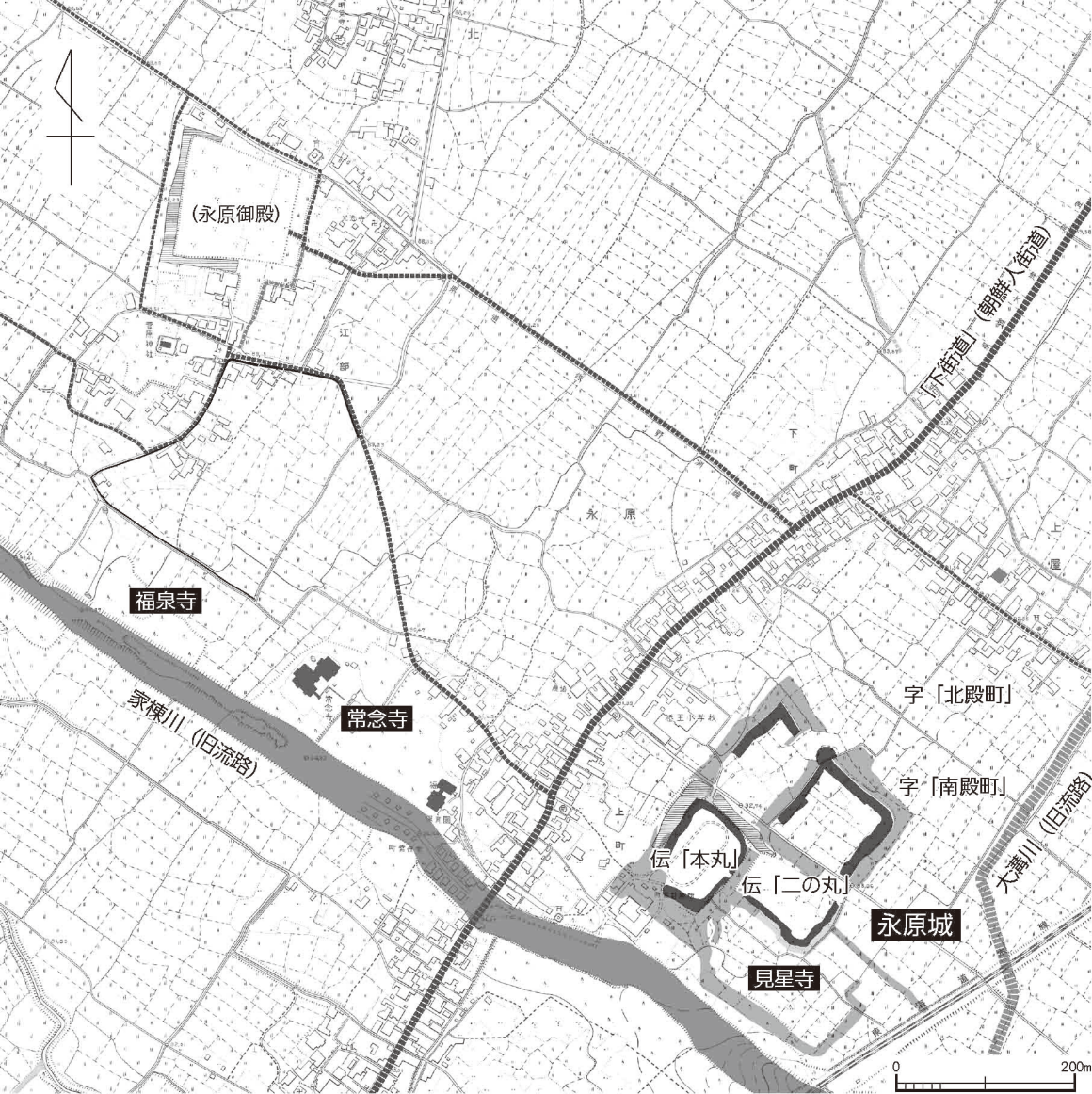
に勝利した徳川家康は、この道を通って伏見・大坂入りを果たします。野洲郡永原はこの街道の沿道にあり、当時は秀吉から与えられた徳川領でもありました。

江戸幕府が開かれた当時、徳川家にとつて野洲郡永原は重要な場所だったので



## 二、戦国時代の野洲郡永原

◀ 戦国時代の永原城とその城下 (昭和35年地形図を使用)



永原城：現在の野洲市立祇王小学校の敷地を中心に城跡が存在した。一辺およそ100mの四角形の曲輪が並列する大規模な平城である。城の周囲には家臣団屋敷地群、大規模な境内の寺院、町屋が存在する本格的な城下が広がっていた。



永原城の発掘調査で検出した石垣

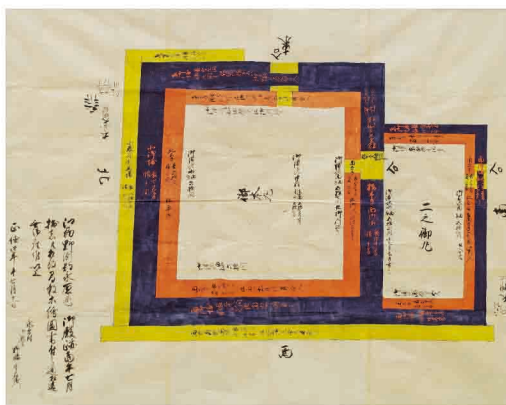
戦国時代の野洲郡永原は、永原氏が治めていました。永原氏は、十六世紀初頭から六角氏の家臣であり、この頃には永原城が築城されていました。

戦国時代の六角氏は、室町幕府内の勢力争いに積極的に関わり、さかんに京都に出兵します。永原氏はその軍の中心を担う存在であり、六角氏家中においても重臣のグループに名を連ねていました。また、都の足利將軍家や公家・寺社とも直接つながりを持つ存在でした。具体的な人物では、永原越前守重隆、永原重虎などが史料に登場します。永原氏は、永禄十一年(一五六八)の織田信長の上洛からは織田氏の傘下に入ります。永原筑前守が信長家臣の佐久間信盛の軍の所属となり、各地を転戦しました。永原城は佐久間氏の城郭となり、織田信長も上洛の時には宿所として利用しています。

その後、賤ヶ岳の戦いや小牧・長久手の戦いでは、羽柴秀吉が永原城を軍勢の中継拠点として利用しました。そして、天正十九年(一五九一)、野洲郡永原は豊臣秀吉から徳川家康へ領地として与えられ、徳川にとって貴重な西国の拠点のひとつとなるのです。

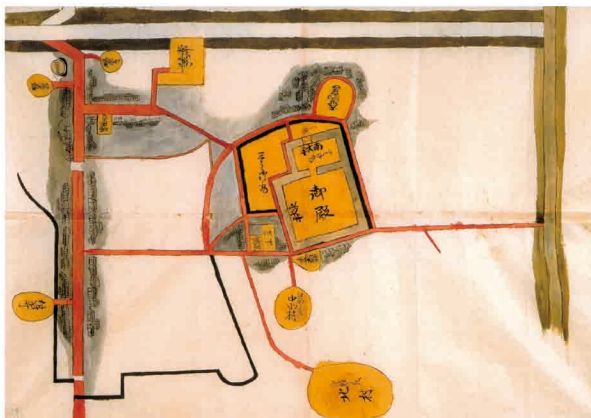


西暦（和暦）	主な出来事
1591 (天正19)	徳川家康、豊臣秀吉から近江国内に領地（在京賄料）を宛行われる。その中に永原が含まれる。
1601 (慶長6)	徳川家康、長期にわたる関ヶ原の戦後処理を終え、江戸下向。途中に永原に宿泊する。この頃に永原御殿が整備される。
1605 (慶長10)	徳川秀忠、將軍就任のために上洛。その途中で永原御殿に宿泊し、数日滞在する。
1614 (慶長19)	徳川家康、秀忠等、大坂冬の陣の出陣途中に永原御殿宿泊。
1615 (慶長20・元和元)	徳川秀忠、大坂夏の陣の戦後処理を終え、江戸下向途中に永原御殿宿泊。
1623 (元和9)	徳川家光の將軍就任にあたり、秀忠・家光が上洛。徳川秀忠が江戸への帰路の途上で永原御殿宿泊。
1634 (寛永11)	明正天皇即位の祝賀を名目として、徳川家光が上洛。永原御殿が大規模に整備され、新たに三の丸が設けられる。家光は上洛時に永原御殿宿泊。

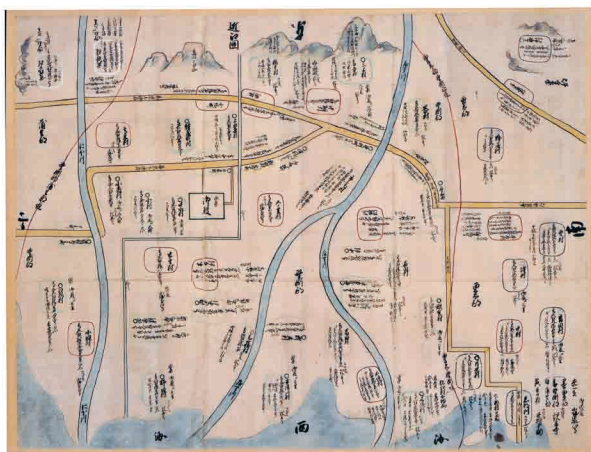


正徳四年(1714)「江州野洲郡永原邑御殿跡絵図」  
(永原共有文書)

当時の「御殿守（ごてんもり）」と庄屋が絵図を作成し、大津役所に届け出られたもの。堀や土塁の規模を表した文書とセットになっている。江戸時代末期の14代將軍徳川家茂の上洛前、幕府から地下に対し、將軍上洛の先例調査が命じられた際にこの絵図が参考とされた。



年末詳「永原村 御殿跡周辺絵図」(永原共有文書)



寛永十八年(1641)「江州栗太・野洲・蒲生郡之内絵図」  
(部分；野洲市歴史民俗博物館蔵)

永原御殿を中心に栗太・野洲・蒲生郡域を描いた絵図。この地域の幕府領の代官と石高が記入され、各村から御殿までの距離も記される。

小牧・長久手の戦いを経て、徳川家康は関東に国替えとなりました。そして、豊臣秀吉からは、徳川家の京・大坂滞在中の費用をあてる領地として野洲郡永原を含む「在京賄料」が与えられました。関ヶ原の戦いの後に築かれた永原御殿は、上洛時の宿泊が主な用途でしたが、徳川家の京・大坂に対する拠点としても重要でした。実際、上の年表のように、江戸時代初期における重要な政治局面で御殿が使用されており、政治的な動向と永原御殿は密接な関係にあつたといえます。

寛永十一年（一六三四）の徳川家光の最後の上洛まで、家康が6回、秀忠は4回、家光は2回永原御殿に宿泊しました。將軍が滞する折は、当地の代官や街道の村々が対応に当たります。將軍の御殿利用が途絶えた後、宝永二年（一七〇五）に建物が焼却されたとされていますが、その跡地は永原村の「御殿守」が管理するようになりました。

永原御殿は、江戸時代初期の政局とともに存在し、その後も地域社会との繋がりをもち存在でした。



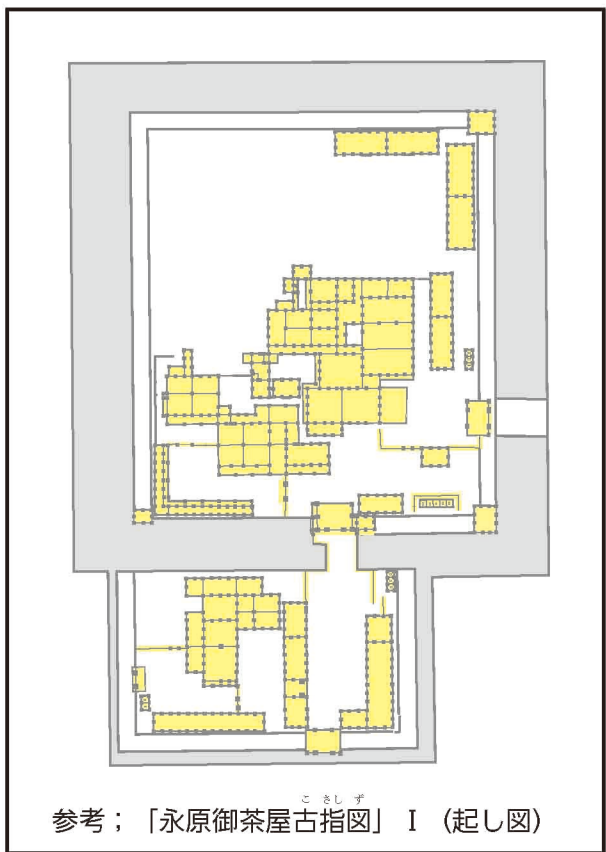
四、永原御殿の全体構造



▲永原御殿復元模型(野洲市歴史民俗博物館)

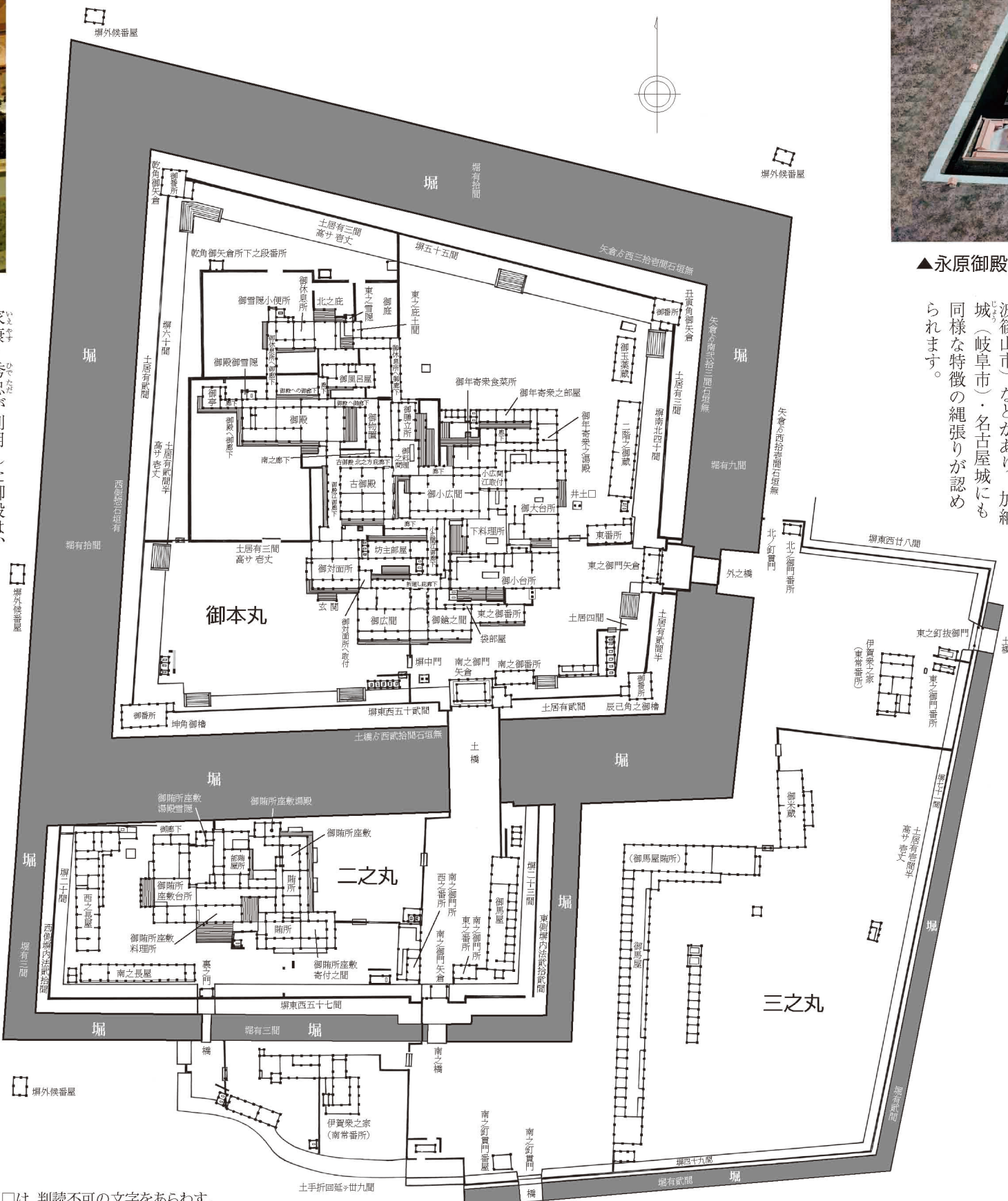
永原御殿の全体的な縄張りプランは、台形に近い形の「本丸」の南側に長方形の「二の丸」が設置される形状です。永原御殿の「二の丸」は、城郭の縄張りという「馬出し」の形であり、本来は籠城戦における城外への出撃拠点に使用されるものでした。ただし、本来の馬出しと比べると規模が大きく、通常の馬出しの機能に曲輪としての機能を付け加えたものであるといえます。

このような城郭の縄張りは、この時期に築城された徳川幕府と関わりの深い城郭の縄張りとも共通するとされています。具体的には、膳所城(滋賀県大津市)・淀城(京都市伏見区)・篠山城(兵庫県丹波篠山市)などが、加納城(岐阜市)・名古屋城にも同様な特徴の縄張りが認められます。



参考; 「永原御茶屋古指図」 I (起し図)

◀本丸西辺の堀側からみた「古御殿」「御殿」「御亭」



□は、判読不可の文字をあらわす。

「江州永原御茶屋御指図」 IV (起し図)

◀二の丸側からみた本丸「南之御門」

家康・秀忠が利用した御殿は、古指図(右下図)のように、本丸と二の丸で構成されていました。寛永十一年(一六三四)の徳川家光上洛にあたり、御殿は大きく拡張され、三の丸が新しく設けられます(中央図)。

家光期の本丸には、およそ二七〇〇平方メートルの面積の御殿建築が存在しました。複雑な構造の御殿も、いくつものエリアに分けて考えることができます。

まず、御殿の南西隅に「女閨」があり、この一帯に「御対面所」「御広間」「御鑑之間」が存在します。このエリアは、使者への対応や来客の控室などに使用される空間です。

御殿中央付近には、「古御殿」「御殿」が存在します。来客・使者の身分などに応じて、將軍との対面も行われる公的な「表向」のエリアです。特に重要な来客に対しては、將軍自ら「御亭」で茶をもてなすことも想定されていたと見られます。

最も奥となる北端部には、「御休息所」など、將軍家の私的な「奥向」の生活空間です。御殿の東側のエリアは、「台所」が中心ですが、老中の控室「御年寄衆之部屋」や、將軍の雑務や幕府の庶務を担う坊主衆の「坊主部屋」などの部屋もあります。要は、短い將軍の滞在中においても、幕府の権威を示せるように建物が設計されていたのです。





## 五、永原御殿の遺構を探る。

永原御殿の遺構としての大きな特徴は、平地の城郭でありながら、遺構が大変よく残っていることにあります。これは、徳川家光の最後の上洛から今日まで、地域で御殿跡を大切に残されてきたことの証でもあります。

建物跡などの遺構は、発掘調査を行うほかに様子を知る手がかりはありませんが、土塁や堀などの大きな遺構は、現地を歩けば容易に観察することができます。また、土塁や堀が残っていない二の丸や三の丸でも、その痕跡が現在の道路や土地の境界として残っている場合があります。地図などを詳しく見ていくことで、江戸時代の永原御殿の様子をうかがい知ることができるとは思います。



③ 櫓台「坤角御櫓」

本丸の南西側の土塁の隅にあたる。天端は約4×約8mの長方形に造成され、かつては番所の櫓があった。



⑤ 櫓台「乾角御矢倉」

本丸の北西側の土塁の隅にあたる。付近には、櫓の建物に葺かれていた瓦が採集された。また、建物の基礎や石垣に使用されていた石材が残っている。



① 本丸北辺の土塁

本丸内部の底面から土塁の天端まではおおよそ3m、土塁の外周にある堀からはおおよそ4mの高さがある。「指図」によると、土塁の高さは「一丈(3.03m)」と記され、ほぼ当時の高さのまま残っていることが分かる。



② 土塁基底部の石垣

この場所は、本丸の南東側の隅にあたり、「指図」の「辰巳角之御櫓」付近にあたる。写真のように、堀に面する土塁の外周の裾に石垣が築かれていた。大きく四角形に成形された石材が当時のものである。



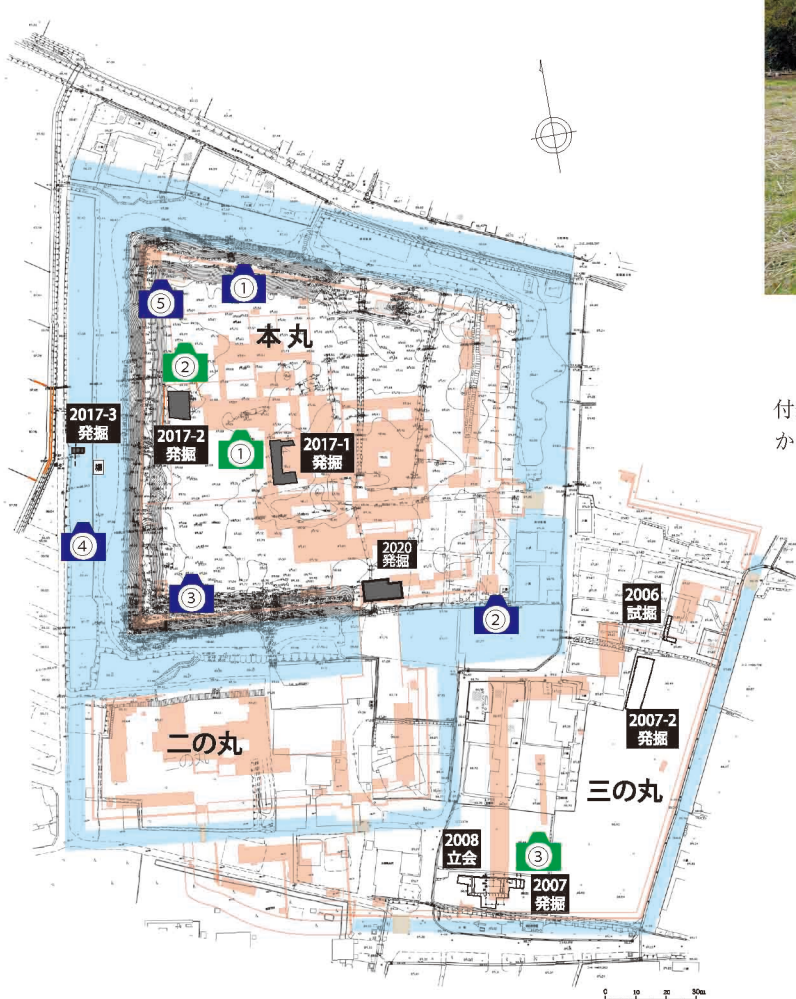
④ 本丸西側の堀

本丸の西辺の土塁の外側には、現在も水堀が残っているが、本来は写真左側の道に接する水田までが堀の範囲であった。この部分の堀幅は約20m存在する。



① 本丸「古御殿」の建物礎石

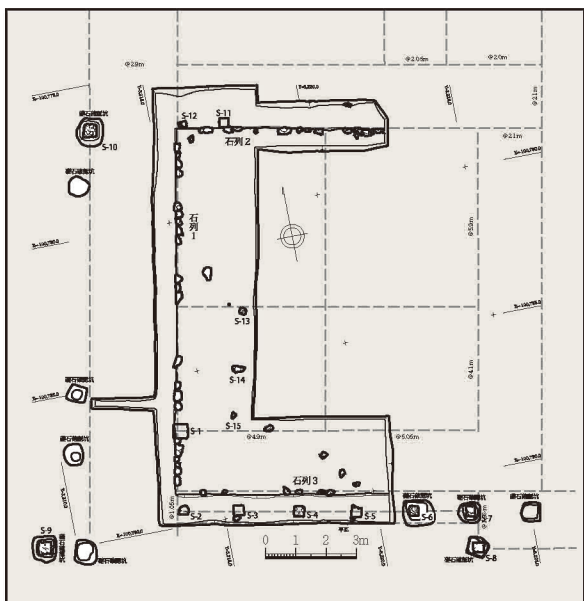
本丸「古御殿」は、家康期の御殿が改修され、家光期にも継続して使用された建物である。建物の外縁に縁石を並べ、四角形に成形された建物礎石を等間隔に配置した痕跡が認められた。ただし、礎石の大部分は建物の解体時に除去されたい。「古御殿」は「表向き」の書院にあたり、主に将軍との「対面」の儀礼が行われる。



## 六、永原御殿の発掘調査

野州市教育委員会では、平成二十九年度から永原御殿跡の総合調査に取り掛かり、初めて本丸内部の発掘調査を行いました。本丸内では二か所の調査区を設定し、いずれも部分的な調査でしたが、ほぼ「指図」に記されるとおりの建物跡を確認しています。

土塁や堀だけではなく、現地には御殿の建物跡も良好な状態で残されていることがわかりました。



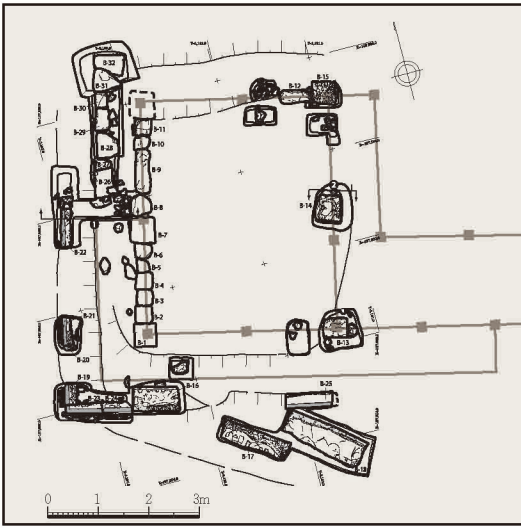
「古御殿」調査区(2017-1)遺構平面図



「古御殿」建物礎石等検出状況

「古御殿」は四つの部屋で構成されていた。西側の外に南側の「玄関」から「御殿」に向かう廊下と接していた。





「御亭」調査区 (2017-2) 遺構平面図



小菊紋棟飾り瓦

本丸北西隅の檜台付近で採集した瓦片である。通常の軒丸瓦の3分の2程度の大きさで、屋根の棟部分の飾りに使用された。



「御亭」建物礎石検出状況

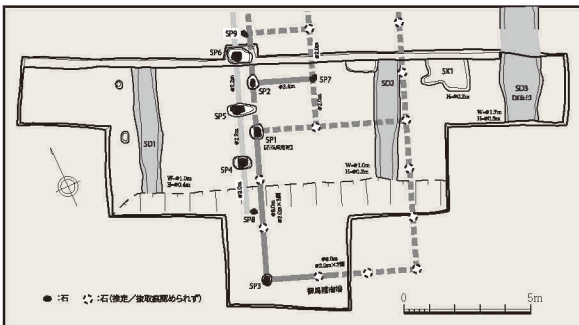
礎石は、もともと露出していた礎石に加え、建物の外周に存在した地覆石の石列、基壇の縁石に使用されたと見られる大型の石材も検出した。

柱を置く礎石は、他の建物と同じく大きく四角形に成形され、地覆石や縁石には石材を組み合わせるための痕跡も認められた。



② 本丸「御亭」の基壇

この地点には、周辺よりも約0.5mほど高い四角形のマウンドが存在する。調査の結果、2間×2間の柱間で建物礎石を検出し、楼阁風の茶室「御亭」が存在していたことが分かった。



「御馬屋」調査区 (2007) 遺構平面図

三の丸の南端付近において、長屋建築の建物礎石を検出した。家光期に新造された「御馬屋」の遺構と見られる。



③ 三の丸「御馬屋」の建物礎石



### ◆城郭探訪のマナー◆

- 一、民家の敷地内や、立ち入りを制限されている場所には入らないでください。
- 一、喫煙やたき火など、火気の使用は止めてください。
- 一、発掘調査をしている場合、調査区には入らないでください。
- 一、遺物の持ち出しはもちろん、動植物を採集しないでください。
- 一、事故やけがないよう、安全につとめてください。



### 「永原御殿」ブックレット

印刷・発行 令和2年11月29日  
編集・発行 野洲市教育委員会文化財保護課  
滋賀県野洲市西河原 2400  
〒520-2492 TEL077-589-6436  
E-mail bunkazai@city.yasu.lg.jp  
印刷・製本 奥野印刷株式会社





野洲市教育委員会